

## 高等教育における看護教育上の現代的課題

呉大学看護学部

佐々木 秀 美

**論文要旨** 本論は職業教育である看護教育が、高等教育に移行しつつある現実の中で、高度実践者としての看護教育上の課題を高等教育の機能から検討を加えた。まず、高等教育の機能として教育基本法の教育の目的は“日本国憲法”24条の国民の基本的人権でもあり、“医療法”に謳われている医療の提供者としての責務の問題にもつながる。その上で高等教育としての大学は、学術の中心として、広く知識を授けるとともに、深く専門学芸を教授研究し、知的・道徳的及び応用的能力を展開させることを目的としている。エリート型教育からマス型教育移行時代の中で高等教育に参入した看護教育は、高等教育の目的を念頭にしつつ、高度実践者として知識・技術獲得を考慮に入れながら、真に社会から求められる看護専門職の育成が必要となる。

**キーワード**：高等教育，エリート型教育，マス型教育，看護教育，職業教育，専門職教育

### ■ はじめに

看護系大学基準協議会が発刊した『21世紀の看護学教育』<sup>1)</sup>の中で、従来の看護教育が大学教育を念頭においた教育ではなかったことを指摘しながら、現在国民の健康を守る専門職の一つとして、看護に対する大学教育の必要性が社会的に認められるようになったと述べている。その協議会報告書には期待される専門職像も明確にされている。内容を要約すれば、看護の専門職者は社会の変化を認識し、対象のもつ健康問題を解決できるように常に知識・技術を学習し続ける学習者でなければならない。と同時に社会の一員としてその責任を自覚し、その社会が求める建設的発展に対して積極的に貢献する必要があるということである。

主として病院の付属看護学校として存続してきた看護教育は、その教育下で教育されたほとんどの看護師がその病院の人材確保のためであった。それは職業教育としての位置づけであり、“学校教育法”の範囲内で考えれば各種学校か専門学校かがほとんどである。しかしながら、機は熟した

というべきか。近年急激に看護大学が増加した。1993年（平成5年）の『看護関係統計資料集』<sup>2)</sup>によれば“University”および“College”として文部省に認可された教育機関は21校であった。その内訳は国が設置したものが10校、都道府県が4校、学校・準学校法人が7校となっている。又、“Junior College（短期大学）”として文部省に認可された教育機関は60校であり、国が設置したものが23校、都道府県が13校、市町村が設置したものが4校、学校・準学校法人が20校である。その後、急激に看護系大学が増加、2005年度（平成17年）の『看護関係統計資料』<sup>3)</sup>によれば大学数は127校に増加した。その数は2006年度（平成18年）、新たに設置認可された看護系大学、次年度設置認可に向けて準備している看護系大学も含めれば、今後ますます増加が見込まれる。その急激な増加で問題になるのは教育の質の問題であろう。

厚生労働省から各看護師等学校養成所に送られた通達、『看護基礎教育における技術教育のあり方に関する検討会報告書』<sup>4)</sup>には、近年の臨地実習における技術練習の範囲や機会が少なくなっ

いること、看護師養成機関における技術教育の到達目標の格差などから、卒業直後の学生においては、技術能力の格差が生じていることが述べられた。技術能力の格差は臨床現場が期待している能力とのずれを大きくしている。つまり、このことは安全で適切な看護・医療の提供への影響が懸念される問題でもある。

社会が看護師に求めているのは何か？看護師はどうあるべきか？かつてそうした看護教育上の問題に着手したのはF. ナイチンゲールである。彼女が求めた理想的な看護師像に近づくべく、その理想は高く掲げるべきであるし、我が国の高等教育に求められる高度学術の本質的な追求を人間的かつ科学的に求めていかなければならないであろう。看護師は諸科学の実践者であり、社会の進歩に即した教育が成されなければ今日の社会に相応しい教育とはいえない。

そこで、本論では、職業教育である看護教育が、高等教育に移行しつつある現実の中で、より高度実践者としての看護専門職者の育成に関わる者として、教育上の課題を高等教育の機能から検討を加える。

## ■ 高等教育の機能

### 1. 一般高等教育

一般高等教育の機能として考えておかなければならないことは、まず法的な側面であろう。1947年（昭和22年）に交付された“教育基本法”の第一条には教育の目的が述べられている。それによれば「教育は、人格の完成を目指し、平和的な国家および社会の形成者として、真理と正義を愛し、個人の価値を尊び、勤労と責任を重んじ、自主的精神に満ちた心身共に健康な国民の育成を期して行われなければならない。」<sup>5)</sup>とされる。この教育目的は2006年（平成18年）の教育基本法改定<sup>6)</sup>でも変更されていない。心身共に健康な国民の育成はまた、“日本国憲法”~~24条~~の国民の基本的人権でもあり、“医療法”に謳われている医療の提供者としての責務の問題にもつながる。国民の育成がどうあるべきか。自主的精神に満ちた心身ともに健康な国民の育成、そして働くことに喜びをもち、社会の一員としてその義務を果たすこと。この“教育基本法”に盛り込まれている内容は大変に重みのある要素であり、その中の一つでも達成できるよう努力する義務が私たち国民にはある。

ここに国民の健康問題に関わる職業人の育成と高等教育との連関がある。

加えて“学校教育法”の第52条には大学の目的が述べられている。それによれば大学は、学術の中心として、広く知識を授けるとともに、深く専門学芸を教授研究し、知的・道徳的及び応用的能力を展開させることを目的としている。つまり、大学教育は広く知識を教授し、その専門分野においては深く研究し、知的にも道徳的にも優れた人物を育成するために存在しているとも考えられるのである。これは2004年（平成16年）度に中央教育審議会大学分科会が示した『わが国の高等教育の将来像』<sup>7)</sup>にも盛り込まれている内容である。その意味で高等教育機関における教育の質の保証は専門職教育ではことさら顕著な問題であり、看護師の養成機関であろうとする高等教育機関にも同様な問題が潜在していることを示している。かつて、ナイチンゲールは優れた看護婦は優れた女性であり、優れた女性は「知性 (intellect), 倫理 (moral), 実践 (activity) の全てにおいて最上のものを惜しみなく与える女性である」<sup>8)</sup>と述べた。これら、ナイチンゲールが示した優れた看護婦の特性は先述した“学校教育法”に規程されている大学の目的そのものであると考える。看護という専門領域における学術的探求と知的にも道徳的にも優れた人物の育成は、その教育開始以来、求められ続けてきた本来の教育機能である。更に健康で道徳的な個人が社会においてそれらの知識をいかに活用し得るかということは 高等教育を受けた個人に与えられた義務でもある。

カリフォルニア大学教授マーチン・トロウ<sup>9)</sup>は「大学は自由な研究活動を基礎にした学問と科学を通して、それが期待されている教育と研究の機能を果たす。」<sup>10)</sup>と述べ、高等教育制度が直面している重要な問題は、財政上、学問上の問題ではない。それは大学の自治と社会的責任 (accountability), すなわち、大学における教授・学問の自由と、大学を設置し維持している社会に貢献する責任との間の、微妙で繊細な均衡をいかにして見つけ出すかという、政治的な問題に他ならないと述べている。

トロウが述べたように、大学の自治と社会的責任、大学における教授・学問の自由と、大学を設置し維持している社会に貢献する責任との間には確かに微妙な問題がある。例えば、社会がどのような人物を育成して欲しいかという問題では、道徳的に優れた人物が必要な場合、大学の自治がそ

れらを可能にするか。学問の自由は教授の関心のある問題への探究になるが、果たしてそれがあある時、ある場所でそれが実際に活用されるようになるかどうかと言うこととは違いがある。そこで、問題はその部分だけを教授することになると広くではなく、ある一部分にだけ秀でた人物の育成になるであろう。デューイは「人格の高い価値と社会的に有為な能力との対立は、劣位者と有為者の厳格な区分を伴う封建的に組織された社会の産物なのである。」<sup>11)</sup>と述べ、「社会的有為な能力が、独り善がりの民主主義社会の理想として主張されるとき、それは、貴族主義社会を特色付けている大衆蔑視の価値観を容認し、持ち越していることを意味するのである。しかし、民主主義が道徳的で理想的な意味を持っているとすれば、それは社会への恩返しはすべての人に要求されるべきであり、また、独自の能力を発達させる機会はずべての人に与えられるべきである。」<sup>12)</sup>と述べている。これは教育の機会均等という個人の権利と、その権利を有した個人の勤労の責任と義務を述べていると思われる。

佐々木秀美が既に『ナイチンゲールと看護教育—その教育目的へのアプローチ』<sup>13)</sup>で検討したようにナイチンゲールが開始した看護教育の目的の一つ、それは人格の問題であった。彼女の教育目的が人格としての教養と共に、看護という職業をとおして、社会に対する奉仕を意味しているとすれば、その教育は看護活動が効果的に実践できるように計画されなければならない。しかもそれは看護師すべてに均一のものでなければならない。今日ある看護教育が実務的な看護師を養成する一方において、高い教養教育を含めた高度な専門教育との教育が存する事事態、教育の機会均等という個人の権利を著しく損ねたものであり、民主主義思想に反するという事になる。何故ならば一方が他方を支配するという事が生じるからである。この意味で看護教育はナイチンゲール時代からの—今日の看護界の指導者が自覚していたかどうかは明確ではないが、—貴族主義社会を特色付けている大衆蔑視の価値観を容認しているということにはならないだろうか。看護師全てに同等の教育を施し、その中から、個人の能力と興味に応じて、研究課程に進むことを奨励し、この事によって看護の発展に尽力する人材を発掘することにもなる。それが即ち、看護を進歩させる原動力になるものと思われる。この教育が可能になって始めて

ナイチンゲールのいう“理論と実践”のともなった看護が実現できると考えるのである。

## 2. 高等教育における看護教育

大学における教授・学問の自由と、大学を設置し維持している社会に貢献する責任との間の、微妙で繊細な均衡をいかにして見つけ出すかという問題は、看護のような高等教育における職業教育ではことさらに問題が顕著である。つまり、大学においてであれ、専門学校であれ、社会的に期待される看護師にはある一定の水準が要求される。これは国家試験という関門を通らなければその成果は見られないということであり、大学で得た知識や技術が社会で適用できないということになる。

さて、それでは大学が自由な研究活動を基礎にした学問と科学を通して、それが期待されている教育と研究の機能を果たす。そのことが役割であるとすれば、高等教育新参者の看護教育はどうあればよいのか。さらに看護師が専門職であるとしたら、どのような教育実践をしたらよいのか。

ナイチンゲールは「自己を統制する力を見につけ、自己のうちにより高い理念を育むこと」<sup>14)</sup>であると述べた。自己を統制するというのは知性のもたらす部分である。それは知識が豊富にあるかというような問題ではない。……すべきという教えは個人の内部に蓄積され、何か必要な決定をするときに、あるいは行動をするときに自己の持っている価値規範がその行動を制する。それは内的規制が起こるからである。

それではこの内的規制はどのようにして行われるか。一般的に内的規制は外的規制が自己のうちに取り込まれる一種の行動規制である。この行動規制は個人がある行動を選択する際に有効に働く。あらゆる価値規範は家庭教育・学校教育・社会教育の成果である。これは倫理あるいは道徳としての問題である。これら道徳に加え、知性が個人の内面を規制する。澤口俊之<sup>15)</sup>は『幼児教育と脳』のなかで、ガードナー<sup>16)</sup>の知性に対する考え方を引用し、知性の本質について論じている。彼によれば我々人類の知性には8つの知性がある。それは、言語的知性、絵画的知性、空間的知性、論理数学的知性、音楽的知性、身体運動的知性、社会的知性、感情的知性の8つである。これらの知性の中で自己を統制する力と言え、感情的知性ということになるであろう。これらの知性を総括しコントロールするのが、スーパーバイ



ザー（supervisor）としての自我であり、これが最も高度な働きを担っている。それは人格、理性、主体性、独創性、創造性などがこの中心的な役割になる。澤口俊之によればこれらに關与している脳が前頭連合野の知性といいPQ（Prefrontal Quotient）と総称している。

さすれば看護実践におけるコミュニケーション技術を高めるには、言語的知性が必要である。論理的思考力がなければ分析力は高まらなるとすれば論理数学的知性は必要であり、技術の適用は看護では必須であるから身体運動的知性は必要である。人間関係が大切になる看護実践では社会的知性も必要であり、自分の感情をコントロールしなければ多くの職種が混在する医療現場では先述した人間関係も形成できない。患者との人間関係が形成されない場合、いかに高度な専門知識や技術を有していても適用できない。特に健康障害を有している患者にはそれがまず大切なことである。それゆえ、感情的知性は最も必要であるということになる。澤口俊之は自己の研究結果から、これらの機能をうまく活用するようにすることが必要であり、PQは探究心や好奇心でその働きが良くなるという。

つまり、より高次の知性を必要とする職業教育では、探究心や好奇心を呼び覚ますような関わりが必要である。それには学習環境を整えることが大切になる。ブルーナー<sup>17)</sup>は「最適の条件のもとに適切に学習するならば、学習の仕方を学習する。」<sup>18)</sup>と述べている。ブルーナーの述べた学習における最適の条件とは学習者個々のレディネスと学習環境のことであると考えられる。学習環境とはいわゆる施設・設備、周辺環境でもあるが、人的環境も含まれる。それでは看護教育における最適な条件とは何か。ブルーナーの主張する学習の最適の条件は、一般基礎教育への適用として述べたと考えられるが、教育環境という意味では看護教育でも同様である。その意味で最適の条件の中で、学習者の探究心や好奇心が呼び覚まされるような学習方法を探究していくことも又必要であろう。

### 3. エリート高等教育の基本特性と職業教育

それでは高等教育の基本特性をふまえた上で、マス型時代の看護教育はどうあればよいのか考えてみよう。まずエリート高等教育の基本的特性として、トロウは以下の3点を上げている。

まず、第一にエリート高等教育は学生を単に訓練し知識を伝達するだけではなく、社会化の機能を果たすことであり、彼らの知性、感性、態度と人格を形成することを目指す高等教育の一形態である。第二にエリート高等教育は、教師と学生の緊密で長期にわたる関係を通して進められるので、こうした関係を可能にするような環境がつけられ、維持されることも求められている。最後にエリート高等教育は学生の野心をかきたて、こうした目的の達成に必要な知的資源と社会的支持を与えるための装置である。そのことによって学生に自信を持たせ、巨大な組織を動かし、法と政治、さらに学問を左右していく力を持たせるようにしている<sup>19)</sup>。そこでは知識や技術教育も行われるが、エリート高等教育の本質とは関係がない。

逆にマス型高等教育の場合は教師と学生との関係はその場限りであり、非個人的な関係を通して、知識や技術を伝達することに中心を持ち、社会においてはどちらかといえば普通一般の役割を果たすように学生を訓練する。専門的職業、官僚、企業経営といった地位の高い職業の場合にも、このことは例外ではない。

イギリスにおける教員養成がエリート高等教育の枠外にあったのもこうした問題からであるとトロウは指摘する。大学は学位の授与権を持たず、学生の野心をかき立てることもなく、公立学校制度に指導者を送り出すことはあっても、それ以外の社会制度に指導者を送り出すことはできない。つまり、公教育制度の中で、教員になるために教育されるのだ。それは日本における初期の頃の教員養成でも同じことである。我が国最初教育制度である“学制”の時期、教員養成はわが国子女の育成をになう重要な職責として教育が開始されたにも関わらず、その教育は“学制”の枠外で教育された。もちろん、看護師の教育はもっと枠外であった。

一つの職業資格を得るために設置された教育機関は、その特定の職業を実践できる者を養成することが大目標である。看護師であれば、看護ができることが大前提にあり、その目的を達成するために教育カリキュラムが構築される。したがって、これらの学校の卒業生が自己の哲学を持ち、その実践において、知性や、道徳的行動や、情熱をその分野で発揮することはあってもその他の分野で、必ずしも指導的立場になり得るようには教育されない。

しかし、同じ職業教育でも医学の場合は違う。武家社会が崩壊した明治維新の頃、卓越した頭脳を持ち合わせた師弟がこぞって医学教育を受け、医療面のみならず、行政面でその力を発揮した。ロックの『教育に関する考察』<sup>20)</sup> やルソーの『エミール』<sup>21)</sup> に代表される様に、ヨーロッパにおける上流社会の子弟の教育は、主として当時一流と名された家庭教師によって行われるのが通情であった。ロックは医師であり、思想家であり、そして彼の思想はイギリスの市民革命につながった。

イギリス社会で上流社会の子弟のみが受けられる高等教育としては、オックスフォード大学(Oxford University) やケンブリッジ大学(Cambridge University) が存在した。本来、この教育機関は古い伝統を持つ大学であり、キリスト教の牧師養成がその主な目的であった。が、そのうち、宮廷人や上流社会の師弟をも入学させるようになったのである。これも高等教育における対象者の拡大の流れであろう。サイモンは『イギリス教育史』でこの両大学が科学の発展には貢献しなかったと述べ、「いかなる専門的知識をも身に付けていないということが、優れて紳士的なのであった。……その目的は古典の勉強を通じて優雅な文芸に通じる事であった。」<sup>22)</sup> と述べている。わが国の平安の都での宮廷生活における生活も基本的には同じであった。自己の知識はその知識を有しているということが大切であり、何かを為すためのものではなかった。しかしながら、そうした優雅さは逆に特定の文化をも形成する。

科学に貢献しない大学教育のあり方は、ビクトリア朝科学の時代にはそぐわないものであり、1848年(嘉永1年)頃には、ナイチンゲールの友人でもあり知人でもあったベンジャミン・ジョウエット<sup>23)</sup> によって改革が推進された。又、中等教育としては宗教団体によってグラマー・スクール(Grammar school) が開設されていたが、これらも主にはラテン語やギリシャ語の教育をしていた。このグラマー・スクールやパブリック・スクール(Public school) はオックスフォード大学やケンブリッジ大学等のような高等教育機関に入る為の予備校的存在であった。これらの教育機関は特権階級における教育であったというのが実情であり、一般の人達には入学を許される事はなかった。しかし、伝統的なエリート高等教育が学問の分野や社会の発展にその力を発揮したかという点必ずしもそうではない。

## ■ 職業専門教育としての看護教育が直面する課題

### 1. エリート(elite)型教育の特徴

それでは一握りの学者や科学者が、なぜ、少数のエリート大学から圧倒的に高い比率で送りだされているのか、トロウの見たアメリカの実情を考慮しながらわが国にも適用してみよう。

一流大学は、有能で野心的な学生の間で知名度も高く評判もよいから、厳しい選抜を経た学生を入学させることができる。次にこれらの大学は一流の学者や科学者にとっても魅力があるから、質の高いスタッフが多数集まってくる。したがって、学生に質の高い教育を与えることができる。そして優秀な学生は選ばれてその大学のスタッフに加わり、あるいは他の大学に送り込まれる。彼らはそこで優秀な学生や刺激的な同僚に囲まれ、また、設備のよい図書館、研究施設、それに少ない授業負担といった好条件に恵まれる。一流大学で学位をとり、そこで教えることは研究機会の面でも有利であり、その結果、学問的に重要な貢献をする可能性も大きくなる。さまざまな有利な条件が互いに補強しあって作り出すネットワークのなかで、その学問分野の第一流の学者と関係を持ち、かれらのお墨付きから生まれる強い自信。この自信が学問的野心をかきたて、視野を広げる重要な素となる。そこには良い循環がある。しかし、パース<sup>24)</sup> の例にもあるように一流大学を卒業した者が、必ずしもその社会で受け入れられなかった例もある。パースはハーバード大学の数学者であった父ベンジャミンより英才教育を施されハーバード大学を卒業した。その後、合衆国沿岸測量部に職を得て1891年(明治24)までその職にとどまり、生涯、教授職につくことはできなかった。彼は不遇な人生を送りながらも、ジョンズ・ホプキンス大学、ハーバード大学で講義を行い、学術雑誌への寄稿などの活動を行った。しかし、パースは19世紀のアメリカの思想においてはじめてプラグマティズム(Pragmatism)<sup>25)</sup> という独創的な思想を示した。

徒弟制度的な一流大学のあり方は、逆にそこに存在する権威が新しいものを受け入れないという問題、あるいは一定の考えかたしか受け入れられない特性は新しい環境や社会の変化、今、そこにある問題を柔軟に解決する力を持たないであろうことも推測できる。さらに、競争社会の象徴でもあるかのようなエリート教育は、日本の現象にも



見られるように、その大学に入ることが最大の目的であり、そこに入学できれば人生の勝利者であるかのような錯覚をもたらす。

さて、逆の場合はどうかについては言及しなくても理解できるであろう。ウサギとかめさんのお話は、人生の勝利者についてよく表している。結局は、学ぶものがその学問にいかに関心を抱くか、学んだことを社会でどの様に適用させるかという問題に尽きよう。そして最後はその人の人生をどう行きぬいたのかということである。現在の日本社会は従来からあった多くの価値観が崩壊したり、新しい価値観が芽生えたりする。そして現実にはエリートで政治・経済的にも社会を動かしてきたであろう人物が、人生の最後の局面で犯罪者になったりする。こうした出来事はエリートのみならず、高等教育を受けた者の、実社会における社会的有用性を根本から覆すことになり、学問が決して人物の形成には役立たないといったことを証明することになるだろう。そこには知性と道德の問題が存在する。

## 2. マス(mass)型高等教育移行時代の看護師教育

わが国の学校教育における教育政策の歴史を見ても、高等教育はわずかに握りのエリートたちのための教育であった。それは、西洋諸国においても同様である。トロウは、アメリカにおける大学教育の変化としてエリート高等教育から、マス型への移行、さらにはユニバーサル(universal)型への移行があり、その移行上の問題として、新しい形態と構造を求める圧力があると述べている。その圧力とは、次の三グループによるものである。そのグループが教育や訓練や資格を高等教育に求めてやってくるとトロウは述べる<sup>26)</sup>。彼の述べる以下の三グループは看護に最も関係の深いグループともいえる。

その第一のグループは過去においては大学に進学する野心を持ちえず、また持っていない、それを実現するために必要な資源を持たなかった貧しく文化的に恵まれなかった人々であり、この種の圧力は道徳的であるとともに政治的な性格のものである。すなわち前者は大学人や政治家の平等主義的な価値観を通じて、後者は特に大都市に生じつつある権力関係についての彼らの考え方を通して圧力を及ぼしてくる。

第二のグループはこれまで大学に入学したこともなく、職業生活の半ばみずから教育を受けたい

と欲し、あるいはよりよい資格を得たいと思っている“成人”である。子供が学校に通う年頃になった主婦、仕事が行き詰ったり、自分の技術の陳腐化に不満を抱く技術者や管理者、軍隊とか公務員生活から早期に引退したりして第二の人生を求めている人々——こうした種類の人々はすべて“拡張された高等教育”(extend higher Education)のますます有望なマーケットを構成する。彼らはもはや現行の成人教育とか、“大学開放講座”(university extension)といった教育形態では満足しなくなっている。

第三のグループとして、大学該当年齢の“不本意”学生である。その多くはゆたかな中産階級の出身者であり、大学就学を強いられているが、現在の大学教育課程の特徴である学問的な“書物中心”の学習に関心を持っていない。この種の学生たちは往々にして一時期正規の学習から離脱(drop-out)して、遍歴を試みたり“社会的に意味のある”分野で仕事をしたりすることを欲しているが、なお大学と何らかのつながりを持ち、ある種の資格証明書の獲得も欲している。

以上、説明したようにトロウが述べた三つのグループを形成している最も顕著な例は、過去に看護教育を受けた者達の大学教育への参入であろう。彼女達はまさに早期に職業は選択したが、専門学校としての教育機関しかなかった人たちである。戦後の苦しい時代に看護師になった人たちは、能力はあっても財政的に豊かではない時期の看護師達であり、向学心は高い。

又、よしんば大学があったにしても、平成の初期の頃をもってしても看護高等教育機関は全体の1%程度にすぎなかった。看護の高等教育を考えたにしても狭き門であると同時に、地方の受験生には地理的な問題があった。看護教育を“学校教育法”で実施しようと考えたのは、少なくともGHQ (General Head Quarters・Supreme Commander For The Allied Powers)の看護教育改革からである。しかし、GHQの看護教育改革が有ったにしても、その時点における日本の社会状況及び戦前の女子の教育状況を勘案しても、その構想が実現できなかったことは拙稿の『歴史にみる我が国の看護教育—その光と影—』<sup>27)</sup>でも明らかである。

わが国は世界に類をみない高学歴社会になった。進学と知的能力とは必ずしも相関しないと思われるが、少なくとも、社会的に活躍している人

物育成はエリート教育によって実現されている。トロウは「高等教育の拡大が職業生活に及ぼす影響の側面に、マンパワー（man power）論者はこれまでほとんど注意を払わなかった。それは一つにはごく最近まで大学卒がもっぱら伝統的な高学歴職業をめざし、大学卒以外の人々によって占められた職業にまで進出し、その性格を変えてしまう方向をとらなかったためだろう。しかし、まさにこうした高学歴者の進出による職業の質的な変化こそが、エリートからマスへの高等教育の移行のもっとも重要な側面のひとつなのである。」<sup>28)</sup>と述べ、高学歴者の供給量の増大は職業資格の変化として、低い学歴でよかったポストが高等教育をうけた人々に与えられるようになる。高い学歴を持った人々と低い学歴を待った人々とのポスト争いで、前者が勝つ。その結果、低学歴者が遂行していたのとは違ったやり方で職務を遂行し始める。高い学歴を持った人々は指導性を発揮し、権限を行使し、技術や想像力を駆使して、その職業の性格を作り変えてしまうというのである。そうした変化の中でトロウは、多くの大学が次のようなカリキュラムの変化を示していると記述している。

書物を離れて行動へ

客観的な分析と批判から主体的な肯定と関与（commitment）

単独の勉強から集団作業と共同的交流の喜びへ  
成績の競争主義から非形式的な成績なしの評価へ

反証の探求を特徴とする無味乾燥で見せかけの客観主義から、関与（engagement）と参加（membership）という報酬へ、また適切な道徳的立場の明確化と確認へ<sup>29)</sup>

教育カリキュラムの変化が学生をして書物を買わないのかと考えてしまうが、現実に現在の学生は本当に書物を買わない。金銭を惜しむということもあるが、看護教育の場合、医療現場の変化が余りに早く、場合によっては出版された書物による看護方法が遅れているという場合もある。

さらに彼は「エリート高等教育はなによりも支配階級に属する人々の精神や性格の形成機能を果たし、学生を行政や専門職業など、多様なエリート役割に向けて準備する。これに対してマス型高等教育の場合には、教育機関は依然としてエリート養成を行うものの、そのエリートの範囲は拡大し、社会のあらゆる技術・経済組織体のリーダー層を含むようになる。そして教育の重点も人間形

成から、特定の専門分化した役割を果たすエリートの養成へと移っていく。万人に進学の機会を提供するユニバーサル型の高等教育機関になると関心ははじめて、多数の学生に高度産業社会で生きるのに必要な準備を与えることに向けられる。」<sup>30)</sup>と述べている。

大学の設置基準は高等教育の質の保障を目指している。大学の民衆化によって引き起こされる教育現場でのディレンマは、教育の質の問題である。どこまで厳格に学生の努力を要求するかという問題に加え、他方ではどれほど内容が刺激的でゆたかであるかという問題である。トロウは「一方の極に与えられるのは深い学識とゆたかな想像力をもった一群の学者が、選び抜かれた学習意欲の高い学生を、文化・科学・学問の豊富な資源に恵まれた環境のもとで教育している大学である。これに対して他方の極には、未熟で学識の点でも劣る教師が、能力の低い、学習意欲も乏しい学生を教えている大学がある。そこでは教師の給与は安く、教師一人当たりの学生数は多いし、図書館は貧弱で座席数も十分ではなく、いきいきした知的な刺激にあふれた教育環境が用意されているとはいえない。」<sup>31)</sup>と述べている。これはアメリカにおける教育の問題を述べているのであるが、日本でも同様に現実的な問題である。

深い学識とゆたかな想像力をもった一群の学者と学習意欲の高い学生、文化・科学・学問の豊富な資源に恵まれた環境のもとで教育している大学、他方、未熟で学識の点でも劣る教師が能力の低い、学習意欲も乏しい学生、教育環境も悪い大学の例、この様な大学の例を挙げようとすればすぐにあがるであろう。教育がいまや、商売になっている現状である。いかに経費をかけないで、多くの学生を受け入れ、経済的に潤うか。看護教育の大学化の流れは、少子化時代の中で、特に大学の生き残りの策とも取れる中で引き起こされている。そのことによって、従来の専門学校より低い看護師の育成がなされるとしたら、そうした者達によって看護される国民は迷惑であろう。

### 3. 看護教育が直面する課題

看護教育は基本的に女子教育として位置づけられた。戦後、成立した“保健婦助産婦看護婦法”に規定されている看護婦の定義に傷病者若しくはじょく婦に対する療養上の世話又は診療の補助をなすを業とする女子でありと規定されたのも明治



初期、あるいはナイチンゲールが女性のための専門職教育としての教育目的が反映されていることであろう。2001年（平成13年），“保健師助産師看護婦法”に規定されていた看護婦という呼称が看護師という言葉に改称された。“婦”というのは成人の女性のことをいい，“師”は専門の技術を職業とする者を言い、ある意味ではある職業に対する尊称とも言える。医師や弁護士に代表される“Professional”な職業として生み出されたのが看護職である。専門職の定義は『これからの看護』<sup>32)</sup>でも幾つか示されているが、その第一に掲げられているものは個人の責任を伴うより知的な職業であるということである。

看護婦という呼称が看護師と変更されたと同時に同法の第二条、第三条、第四条、第五条に規定された看護職種の……の行をなす女子をいう、の女子の字が削除された。つまり、看護婦という呼称が看護師と変更された背景には男性看護師と女性看護婦という二重の不合理性を解決するためのものでもあった。（論述上、ここでは婦であった時代は看護婦とし、師であった時代背景を有しているときは看護師とする。）従って、法律上、看護婦の婦が師になったからとて必ずしも看護を行うものが専門職であると意識づけられるとは限らない。

看護が専門職であるとしたら社会が看護師に求めているのは何か？かつて、ナイチンゲールは、病気とは回復過程であると定義し、病院のあるべき姿を示した。彼女によれば病院とは健康を害したものが健康を回復するための学習の場である。そこでナイチンゲールはその回復に関与するべき看護婦は病気に対して理解していること、病気の人をどう援助すればよいかを知っていること、更には、自分が援助を行う対象が人間であることをわきまえていることが重要であると述べている。その上でナイチンゲールは“Nursing is not only an art but a character”と述べ、看護そのものに人格を持たせようとした。看護における人格とは勿論、看護を行う者の人格的意味も有するが、看護そのものにも人格があり、そこには独自性があり、意思決定がそこにある。そして、その看護に関わる看護婦は優れた女性でなければならないとナイチンゲールは述べた。誤解のないようにして欲しいが、それは決して看護から男性を排除しようとしているのではない。時代的に言えば、むしろ、男性には多くの職業があり、選択肢も多

様であったが、女性には解放されている職業が少なかったのである。それゆえ、ナイチンゲールは医療の中で実在する粗悪な看護職を、教育によって質的向上を図り、女性の専門職として高めようとしたのである。したがって、ナイチンゲールの高邁な感情が彼女をして優れた看護婦は優れた女性であり、優れた女性は知性、倫理的行動、情熱を持っていると述べさせたのであろう。

人がある時期、健康を害し、その療養目的で入院してきた場合、その世話にあたる看護師が種々の疾患を持った人のあらゆる場面に関わっている、全人的看護を志向しようとしたら、現行の“保健師助産師看護師法”の看護師の定義は狭いと言えない。看護師はナイチンゲールが定義したように人格であると共にその看護の対象である患者に対しても理性的でなければならない。それと共に看護師は実践ができなければならない。いわゆる看護過程（査定、診断、計画、指示、実践、評価）である。この実践が患者に対する看護師としての責任である。この責任は好むと好まざるに関わらず、もはや、看護師は医師の指示といった範囲から分離され、個人の行った問題に関して自己責任を伴っているものである。看護師はその事が必要かどうかの責任ある判断ができる教育を既に受けているという認識の下に、その責任を取るべき立場にあるとする昨今の医療過誤における司法判決の例はそれを裏付けるものであろう。従来の医師の監督下における職業では既になく考えなければならない。この様なことから考えても看護の教育は看護師自身の自己責任が問われる職業であり、職業的に自立しているものである。看護師は患者に対して健康上の責任を担う重要な役割を持つものであると理解される。この理解が成立すれば看護教育に対しては知識、技能、人格共に優れていなければその業務に従事することはできない。

ナイチンゲールが構築した教育のABCも、当時の科学思想から考えられたものであり、より知的で科学的な要素を持っていた。その教育のAは病気の理解、Bは看護法の取得、Cは対象の理解である。しかしながら、教育のCである対象の理解に繋がるような諸科学の発展が当時不十分であり、更に教養科目（Liberal Art）は特権階級の教育であった為、特にその精神に関しての学究がなされなかった。その為、ナイチンゲールは看護を“Professional”であると考える一方、“神の僕



としての仕事”，つまり“天職（Calling）”と考えた。自己が求める仕事，それは個人の中に内在するその仕事のための特別な能力であり，その能力を生かすための仕事が神から授けられた仕事，すなわち天職であるとナイチンゲールは考えたのであろう。マックス・ウェバー<sup>33)</sup>は『職業としての学問』<sup>34)</sup>のなかで，職業に献身することの重要性と，その仕事の達成を通じて自分を生かすことが“Calling 天職”であると述べている。つまり，これは言い換えればナイチンゲールの主張と一致する点である。

続けてナイチンゲールは「看護婦が持つ人格的な感化力というものは，どんなに単純な看護行為においても，すべての看護技術を全部合わせたと同等くらいに，看護するうえにおいて，基本的な要素だということである。それ故に自分の天職に対する看護婦の関心は，患者に対する人間的な関心と，その症例に対する理性的な関心，さらに自分の技（art）に対する技術（technical）的な関心とを包み持つものでなければならない。言い換えれば，心と頭と手である。」<sup>35)</sup>と述べている。

つまり，ナイチンゲールは自分の天職としての看護に従事するものは3つの関心，すなわち，頭（head）と手（hand）と心（heart）を持つべきであり，それらを十分に使ってその活動に邁進しなければならないと考えたのである。この教育観はペスタロッチー<sup>36)</sup>的でもある。ペスタロッチーの教育観は，まず人間としての普遍的な能力を啓発する一般陶冶の理念である。それは自律的な自由教育によって試みられる。この内在する人間性を現実化する過程が“基礎陶冶”の方法の原理であり，その基礎陶冶は知識（head），身体（hand），意志（heart）の要素を持っている。彼はこれら3つが調和（harmony）的に発展されなければならないと主張する。ナイチンゲールもまた“頭と手と心”，この3つが調和して初めて専門職業人としての役割が果たせると考えたのであろう。その意味で，ナイチンゲールが開始した看護教育は，彼女自身の教育観の中により哲学的なものを見出し，隣接科学における哲学者あるいは教育者の主張するものとの類似性を見出すのである。しかしながら，ナイチンゲールはその実践においてより聖職者の要素を求めており，その教育

が知的要素より慈善的要素のみが強調されたとき，それは学問の世界から大きく逸脱していくであろう。ブルーナーがその著『教育と文化』<sup>37)</sup>の序文で述べたように，ある分野の，その教育の精神性と言うものは，その文化的環境やその資源を考慮に入れない限り，理解はできないと言うのは真実であると筆者は考える。

## ■ おわりに

看護教育上の現代的課題について，高等教育に変換されつつある昨今の現象を好ましいものとしてとらえつつも，なお，職業教育としての看護教育がいかにあるべきか。あるいは高等教育の機能を維持しつつ質的整備をしていくことの重要性について論じた。ナイチンゲールが求めた理想的な看護師像に近づくべく，その理想は高く掲げるべきであるし，我が国の高等教育に求められる高度学術の本質的な追求により科学性を求めていかなければならないであろう。

変化の激しい現代の中で看護専門職者をどう教育するかはその時代の文化によって規定される。なぜならば，一つの文化は，ある思想や価値観によって形成され，その文化の中で教育という機能が発揮できると考えられるからである。看護という機能が実践を伴い，その実践には必ず，その看護を受ける対象者が存在する。道徳より個人の権利意識が強い今日，諸科学の発達，社会環境の変化，国民の教育水準の高さ等，ナイチンゲールの時代の比ではなく，人格あるいは健康を阻害する因子も複雑化の一途を辿っている。従って，看護理論も人のニーズの側面からのみならず，社会的適応や人の精神機能の側面から展開されている。そうした理解にはカリキュラム構築の際に，自然科学（Natural Science）の分野，あるいは教養科目の教科を多く配列する事も必要であろう。ナイチンゲール自身が述べたように，看護師は諸科学の実践者であり，社会の進歩に即した教育が成されなければ今日の社会に相応しい教育とはいえない。看護師には人間の基礎陶冶としての知識（head），身体（hand），意志（heart）の要素の調和（harmony）的發展が最も望まれるものである。

注

- 1) 大学基準協会；21世紀の看護学教育，2002年
- 2) 看護問題研究会；看護関係統計資料，日本看護協会出版会，1993年
- 3) 看護問題研究会；看護関係統計資料，日本看護協会出版会，2002年
- 4) 基礎看護教育における技術教育のあり方に関する検討会報告書，2003年，3月17日，厚生労働省医制局看護課長通達
- 5) 文部法令研究会監修；文部法令要覧，ぎょうせい，2003年，p.7
- 6) 教育基本法についての説明資料；文部科学省通達，2006年5月づけ
- 7) 中央教育審議会大学分科会；わが国の高等教育の将来像，平成16年9月16日付
- 8) F・Nightingale (1874), Letter from Florence Nightingale (湯慎ます他訳；看護婦と見習い生への書簡，ナイチンゲール著作集第三巻，現代社，1985年，pp.430-431)
- 9) マーチン・トロウ (Martin A. Trow 1926-)；ニューヨーク生まれ。ステューブンス工科大学で機械工学を学んだ後，コロンビア大学で社会学の学位を取得，その後，コロンビア大学やベニントン・カレッジで教鞭を取り，1957年よりカリフォルニア大学に迎えられ，現在は同大学の公共政策大学院 (Graduate School of Public Policy) の社会学教授。
- 10) Martin A. Trow 著，天野郁夫他訳；；高学歴社会の大学 (1 The Expansion and transformation of Higher Education, 1971, 2 Problems in the Transition from Elite to Mass Higher Education, 3 Elite Higher Education: An Endangered Species? の論文をまとめたもの)，東京大学出版会，1998年，序文
- 11) John Dewey, Democracy and Education, The Macmillan, 1916年，p.128
- 12) 同前掲書，p.128
- 13) 佐々木秀美著；ナイチンゲールと看護教育—その教育目的へのアプローチ，看護教育，Vol.36, No.1, 1995年，pp.67-71
- 14) F・Nightingale (1874), Letter from Florence Nightingale (湯慎ます他訳；看護婦と見習い生への書簡，ナイチンゲール著作集第三巻，現代社，1985年，p.332)
- 15) 澤口俊之 (1959-)；東京生まれ。北海道大学理学部生物学科卒業後，京都大学大学院研究科終了。エール大学医学部神経生物学科リサーチフェローを経て京都大学霊長類研究助手，北海道大学文学部・心理システム科学講座助教授，1999年 (平成11年) より同医学部脳科学専攻教授になった。
- 16) ガードナー (Howard Gardner 1943-)；ペンシルベニア州生まれ，ハーバード大学大学院終了。PH. D. 現在，ハーバード大学教育学大学院教授 (認知・教育学)，専門は認知心理学，神経心理学。『Frames of mind, 』f Multiple intelligences. New York Books, 1983, The mind s new science (1985) New York Basic Books (佐伯畔・海保博之監訳，認知革命，知の科学の誕生と展開，産業図書，1987) などがある。
- 17) ブルーナー (Bruner Jerome 1915年-)；心理学者。ハーバード大学 (1952-72) で心理学の博士号を得た後，同大学教授となった。心理学における現象学的な伝統の主要な提唱者である。
- 18) Bruner Jerome, The Process of Education, the President and Fellows of Harvard College 1999年
- 19) 同前掲書，pp.135-136
- 20) John Lock, Some Thoughts Concerning Education, (服部都知文訳；教育に関する考察，岩波書店，2000年)
- 21) Jean Jacques Rousseau (1762), Emile (永杉喜輔他訳；エミール，玉川大学出版会，1984年)
- 22) B・サイモン著，成田克矢訳；イギリス教育史 I，亜紀書房，1977年，p.17
- 23) ベンジャミン・ジョウエット (Benjamin Jowett 1817-1893)；英国のギリシャ哲学者。ナイチンゲールの思想に共鳴し，彼女の仕事を手伝い，多くの助言を与えた。ナイチンゲールの生涯の友人である。
- 24) パース (Peirce Charles Sanders 1839-1914年)；アメリカの哲学者。パースは19世紀のアメリカの思想においてはじめてその独創的な姿を示した。アメリカはそれまで独自の思想を表現できずにいたが，パースはそれをプラグマティズムにおいて語った。

- 25) プラグマティズム (Pragmatism)；パースの哲学において，認識は実在と観念との一致である。その場合，認識は知覚，論理，行動という過程からであり，この過程から離れて認識することはできない。パースが究極に目指すものは，人間のプラグマ（行動）ということである。人間の思考が人間の行動の目的と密接な関係にあることを表すために用いられた。実践的な行為というものが科学的であるという発想そのものにパースの新しい着眼点がある。
- 26) 前掲書 9)， pp.41-42
- 27) 佐々木秀美著；歴史にみる我が国の看護教育—その光と影—，青山社，2005年
- 28) 前掲書 9)， pp.102-103
- 29) 前掲書 9)， p.35
- 30) 前掲書 9)， p.65
- 31) 前掲書 9)， p.92
- 32) Ester Lucile Brown, Nursing for The Future (1948) (小林富美栄訳；これからの看護，日本看護協会出版会，1989年)
- 33) マックス・ウェバー (Max Weber 1864-1920)；ドイツの社会学者・経済学者。ハイデルベルク・ベルリン大学に学び，1893年からベルリン大学で最初の教授職についた後，ベルリン大学，フライベルク大学，ミュンヘン大学で教授職に就いた。『プロテスタンティズムと資本主義の精神』は彼の代表作である。
- 34) Max Weber (1919), Wissenschaft als Beruf (尾高邦夫訳；職業としての学問，岩波文庫，2000年)
- 35) Florence Nightingale, Remarks on a Register for Nurses (1892) (金井一薫他訳；看護婦登録制度についての意見書—王立英国看護婦協会への見解への反論，総合看護，Vol.1，1987年，p.33
- 36) ベスタロッチー (Johann .Heinrich Pestalozzi 1746-1827)；スイスの教育家。貧しい児童を対象とした大規模教育のパイオニア。『ゲルトレートはいかにしてその子を教えるか』の中で，教育の過程とは子どもの生来の才能が徐々に花開くものであるととき，それは観察によって促進されるという独自の教育観を明らかにした。
- 37) J.S. ブルーナー著，岡本夏木訳；教育と文化，岩波書店，2004年